

敗神話と言われていました。私も香取さんのお陰でワールドカップ本戦やアジア最終予選などでドイツやバーレーンを訪れて、その地でSmaSTATION!!を生放送でオンエアしました。

槇: 699回まで続かれて、最終回では香取さんと大下さんがハグをされたとのことですが、香取さんとハグ出来た人はなかなかいないですね(笑)。

大: 本当にそう思います!いつものオンエアでは最後の5秒を香取さんが締めて下さっていました。最終回、私は少し離れたところで立っていたのですが、香取さんが「大下さん!」とハグして頂き、その優しさで私は泣けちゃいました。国民的アイドルと一社員がこんな心から信頼しあえるというか、何を言っても受け止めてくれましたし、腹を割ってお話出来た方と共演できたというのは私の中で貴重な財産です。今後は私が企画書を書いて700回目を是非やりたいと思います。

槇: ここからは「現在」について語って頂きます。ご自身の名前が番組名となっている「ワイド!スクランブル」では、月曜日から金曜日までの生放送と非常にタフな仕事だと思います。分野も政治・経済・外交から時事問題、スポーツ、芸能、気象情報など多岐に渡ります。また、コロナ禍でもありきと様々なご苦労があると思います。テレビに映らない苦労話や番組を見るポイントなど教えていただけませんか?

大: 割と海外のニュースを扱うことが多いのです。そのため、毎日の出社時間が年々早くなってきました。通常午前8時半からスタッフの方々と打ち合わせをしますが、5時半には出社して複数の新聞に目を通します。同じニュースでも保守系からリベラル系まで目を通して論調の違いを確認します。また最近ではアフガニスタンや中国、ハイチ、レバノン等を扱うことがあったので、まず地図を見てどこと接している等から始まって、人口・宗教・民族・産業など基礎的なことから調べるのですが、私はなんとモノを知らないのだなと実感します…。

槇: 附属で勉強しているから大丈夫ですよ!

大: 自分は何がわからないのかを把握することから始めて、今日なぜこれを取り上げるのか、ニュースの核は何なのか、視聴者の知りたいことはどういったことなのか、ゲストの先生に何を質問すれば良いか、コメンテーターの方にはどのようなコメントをもらえれば良いか、等々自分の中で優先順位をつけながら頭に入れようとするのですが、番組で扱うニュースの数も多いので全体打ち合わせまでに自分の準備が間に合わないこともあったりします。そこを

他の出演者の方々に助けていただいています。毎日ニュースと格闘している感じですね。

槇: 政治にしてもどちらかに偏ることも出来ませんし、常に中立的・公正な立場でメインMCを務めなければいけませんね。様々な事件もある中で、そこには被害者・加害者を含めて様々な立場の方々の心情を思って報道する必要がありますよね。

大: 仰る通りでバランスが非常に難しく、いろいろな考えを持たれる方が御覧になっているので一方的にならないよう注意が必要です。観てくださる方にとって自分の思いが誰からも出てこないというのが一番のストレスになります。ですから、出来るだけ多面的・多角的な見方を提示するように心掛けています。なかなかそれが上手いかずに、毎日落ち込んでいますよ。2時間35分の生放送で寄る年波もありまして、金曜日の放送が終わった時、最初の頃は家に帰るとあしたのジョーではないですが起き上がれない、服も着替えられない、メイクも落とせないみたいな状況でした。しかし、人間は段々順応する生き物で、疲れながらも少しずつ慣れていきました。

槇: そういった疲労困憊の中で、オフはどうやってリフレッシュされているのですか?

大: 月曜から金曜はお昼の生放送、SmaSTATION!!を受け持っていた頃は土曜の生放送が終わって家に帰ると深夜2時くらいでした。日曜日に起きたらもう半日しかないという生活が15年続きました。だから、今は土日が休めるだけでもありがたいと感じます。そこでは健康の為にウォーキングをしたり、平日見られなかった番組を録画でチェックしたりします。また翌週のゲストの方が決まっていたりすると、例えば政治家の方であればその方の著書を読んだりします。また、4月などクールの最初にドラマのゲストの方が番組に出演されます。「Doctor-X外科医・大門未知子」の米倉涼子さんや「科捜研の女」の沢口靖子さんだったりするのですが、そういうドラマの第1回のDVDを見たりとか、映画の宣伝ですと先にその映画を見たりですとかそういう準備のようなことを土日しますね。

槇: 休みといっても、実際は仕事につながることはばかりですね。

大: そうですね。本当はもっと仕事と関係ないことをしたり、友人と見聞を拡げたりしたいのですが、ここのところのコロナ禍では難しいので、最近はインドアな休日をごしています。

槇: 最後に「未来」について触れていきたいと思っています。2020年6月には役員待遇エ



東京アカシア会(2019年6月)にて
槇本会長と一緒に

グゼクティブアナウンサーに就任されました。お仕事でもプライベートでもいざいざでも結構ですので、今後の展望について教えてください。

大: 私は中長期的な視野があまりなくて、今日のオンエアを頑張る、ちょうど今もアカシア探検隊のインタビューをきちんとお話をさせて頂くというように、今日明日のことしか考えられません…。周囲のスタッフも頑張っているんで、先のことよりも一日一日のオンエアをしっかりと良いものを生み出し、スタッフと一緒に喜びあえるよう、その日に最善を尽くすという考えです。例えば番組が最終回を迎えた時に「あの時もうちちょっと頑張れば良かった」というように後悔はしたくないので、「本当にやりきった」と、また1ミリでも質の良いものになるように毎日の放送に全力を尽くしています。

槇: 本当に毎日様々なニュースがあって、それと格闘しながら視聴者の皆様に分かり易くお伝えすべく、一日一日を精一杯こなしていくことしかないですね。

大: そうですね。2021年10月から24年目に入りましたが、たくさん災害等も報道してきました。東日本大震災、その後の原発事故、近年の広島でも複数回に亘る豪雨災害など、毎年のように全国各地での集中豪雨・台風などによる被害が起こっており、いつ何が起こるのか分からないことを日々報道する中で、やはり一日一日をなるべく悔いなく全力で生きるということしかないのかなと、自分で納得出来るものを積み上げていく生き方をしていきたいと感じています。

槇: 2021年大相撲秋場所で優勝した新横綱である照ノ富士関も同じことを言っていますよね。「一日一日、目の前の取り組みを一生懸命やっていくことが足跡となって残っていくんだ」と仰っていました。

大: 本当にそうだと思います。大相撲のお話が出ましたが、私もカーブが好きなのでもっとスポーツ関連についても幅広く報道していきたいです。また、私自身が広島出身者なので8月6日、9日、15日のように

忘れてはならない日は、平和に関する特集を組んで報道を続けていきたいと考えています。

植: それでは、在校生・後輩へメッセージをお願いします。

大: コロナ禍において学校行事が中止になったりして大変だったと思います。ただ、この経験が将来活きる時が来るのではと思います。私は社会人になって四半世紀以上経ちますが、嬉しかったことよりも、辛かったことや悔しかったことが後々役に立っています。また、附属は自由な校風だと感じられていると思いますが、確かに私が在学中も制服等をカスタマイズしたり、髪の毛をアレンジしたりする人が周囲にも多かったです。こんなに自由にさせてもらって良いのかなと感じていました。だからこそ先生に信頼してもらっているのかなという気もして、そんな先生達を悲しませるようなことはできないと感じていました。ちょっとしたやりとりで忘れられないことがあって、私が教員室に行って「男子が●●なんですよ!」と喧々言ったら、ある先生が「まあ〜、いいではないか」と仰ったのです。大目に見るとか許すとか、もっと大らかになりなさいというのをやんわりと教えて頂いたのかなと思っています。岸田新総理の「分断から協調へ」ではないですが、「寛容さ」は大切だと思います。今の時代は処罰感情の強さがSNSなどで見受けられますが、社会全体が行動している人、新しいことにトライしている方々に鷹揚になっていくことで、呼吸が楽になる世の中に変っていくのではと思います。また、附属の自由な校風で育った在校生の皆さんには、どんどんいろいろなことに挑戦して頂きたいです。失敗しても当然だし、その失敗に臆せずチャレンジするような生き方がきっと楽しいと思いますよ。「最短距離が最適解」とは私は思いません。道草であったり別のことをして上手くいかなかったりすることが、実は後々すごく意味のあることも多々あります。ノームスの人生なんてありえません。自分のアンテナが反応することにどんどんチャレンジをして、自由に伸び伸びと楽しく人

生を歩んでいって頂けたらと思いますし、我々が何かサポートできることがあれば力になりたいと思います。

植: コロナについて触れられましたが、前回の高校卒業式の自署名簿提出の辞で、「体育祭の直前まで練習を一生懸命やってきて、結局コロナで体育祭は中止となり在校生は打ちひしがれたのですが、ここまで一生懸命やってきたことを後輩たちに残すことが自分たちの役目だ」と言われていました。この姿勢が素晴らしいと感じました。私もその言葉を思い出すと、今喋りながら涙が出そうに…。

大: 私も泣きそうです…。披露する機会は無くとも、準備をして取り組んだということは確実に自分の中に残りますし、途絶えることないよう後輩に伝えていくということは意義ある素晴らしいことだと感じます。自分を誇っていいし、自分を褒めていいと思います。スポーツだけでなく文化系も含めて試合や披露する多くの場所が失われましたが、そこまで努力したという事実は消えませんし、いつかその努力した経験が自分を救ってくれる機会があるはずで。

植: 最後に大変難しい質問ですが、現状コロナ禍のため、実際に会員が集まる同窓会活動ができず、アカシアの素晴らしさを伝える場を設けることが出来ません。2025年の120周年記念式典も控え、今後の活動について、どのように考えられていますか。

大: 今日は皆さん離れていても繋がる事が出来ていますし、このコロナの影響でデジタルなど進歩する技術もたくさんあると思いますし、何か新しく獲得できることもあるはずで。附属は良い意味で何でもありで躍動感のある自由な校風なので、過去にとらわれない、例えば海外の方と繋がるなど色んな展開が今後期待できると思います。

植: まさに今日のインタビューも今までにない発想でした。従来であれば担当者が大下さんのところに赴き、時間を調整して録音してという流れでした。コロナがもたらしたのは、今日のようなやり取りが出来るようになった、海外の方とも繋がる事が出来

るようになった、多くの仲間が一同に繋がる事が出来るようになったというのは新たな発見でもありますし、新たな時代に移りつつあるということですね。こういったことも考えながら120周年に向けて考えてみたいと思います。また色々御意見頂ければ幸いです。

大: かしこまりました。宜しく御願います。

植: 私も2020年に会長に就任してから、まだ皆さんと実際に集うことは出来ていないのですが、アカシアは本当に素晴らしい同窓の集いの場です。先輩も後輩も「ワイドに!スクランブル!出来る場」としてアカシア会をこれからも盛り上げていこうと思います。これからの大下さんの益々のご活躍をお祈り申し上げます。

大: 実は2021年9月28日に人生初の本を出しまして…。

植: それは素晴らしい!!

大: 「たたかわない生き方」とうタイトルなのですが、広島の子少期の頃なども記載しておりますので、お時間がありましたら是非…

植: 食べるように読ませて頂きます!

大: 私自身が人と争ったりすることが苦手ですが、平和都市広島に生まれたものとして「たたかわない」という「たたかい方」で今まで生きてきました。そういった自分なりの考え方を表現していますので、どうぞお楽しみください。

植: 本日はありがとうございました。



左上より: 植本会長 大下氏 陰山
左下より: 松下 大藪

初対談の締め、応援団長であった植本会長より大下さんに「フー!フー!容子」と応援エールを送っていただき、無事終了となりました。

会報委員会: 陰山秀明 (63回)、

松下督克 (75回)、大藪盛生 (86回)

※大下さん著書は16頁で紹介しています。



ECベース 合同会社

代表 松浦 勇人 (76回)

082-292-7344

info@ecbase.net

米Amazon.comで日本製品を年間1億円販売しております。

〒730-0806 広島県広島市中区西十日市町6-4-101

アルバイト募集中!